

感覚障害起こす「多発性硬化症」

標準薬効かぬ患者見極め

阪大が新手法

介助がないと歩けないほどに悪化した患者は、歩ける距離が短くなる程度だった。初から別の薬を使えば治療効果が上がる可能性がある。成果は米免疫学会誌に3日掲載された。

大阪大学の中辻裕司講師や熊ノ郷淳教授らは、感覚障害などが起きる難病「多発性硬化症」で標準的な薬が効かないタイプの患者を見極める手法を開発した。血液中に特定のたんぱく質があると突き止めた。治療前の血液検査に応用できれば、早いうちから別の治療薬を投与できる。多数の患者でさらに検証し、実用化を目指す。

多発性硬化症は脳や脊髄、視神経などに炎症が起り、運動まひや感覚障害などを起こす難病。国内患者は約1万2000人。一般にインターフェロンベータが最初の治

療に使われる。患者によつては効果がないだけでなく、悪化する場合もあった。

マフォリン4Aに着目した。インターフェロンベータ療法を受ける患者約30人を調べると、血中にこのたんぱく質が目立つ患者は4〜5年後には